東京外国語大学 博士学位論文 Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

第1章

現代半島スペイン語における二形式の機能

1. 1. 基本的意味と用法

本節では、現代半島スペイン語における[1]二形式の基本的意味をいくつかの代表的な記述によって確認しておこう。以下、各記述における二形式の名称と定義をあげていく。

(1) RAE (1973)
単純過去形 — pretérito perfecto simple
現在完了形 — pretérito perfecto compuesto

まず、スペイン王立アカデミー(Real Academia Española, 以下 RAE と略す)の記述を見てみよう。RAE (1973: 468)によると、単純過去形は次のように規定されている。

"Es un tiempo pasado, absoluto y perfecto."
「絶対的で完了的な過去時制である。」

つまり、「絶対的・完了的過去時制」とされる。また、瞬時動詞(verbos desinentes)であるか、持続動詞(verbos permanentes)であるかによって次のような意味を表すという。

"Con verbos desinentes por su significado, expresa la anterioridad de toda la acción"
「瞬時動詞の場合、行為全体の前時性を表す。」
e.g. El centinela de la muralla lanzó un grito de alarma y disparó también.
「城壁の歩哨は警戒の叫びをあげ、発砲した。」

"con los permanentes, la anterioridad de la perfección."
「持続動詞の場合、その行為の完了の前時性を表す。」
e.g. ¿Sin duda sabías la llegada de mis hijas? ... —La supe en el Palacio.
「確かに君は私の娘たちの到着を知っていたのか。—私はそれを宮殿で知った。」

一方、現在完了形は次のように説明されている(p. 465)。

"Significa en la lengua moderna la acción pasada y perfecta que guarda relación con el presente. Esta relación puede ser real, o simplemente pensada o percibida por el hablante."
「現代語では、現在と関連をもつ、過去の完了した行為を表す。この関連は現実のものでもありうるし、話者によって単に考えられたり感じられたりしたものでもありうる。」

---

[1] 本章では、スペインで話される言語のうち、カスティーリャ語における一般的な使用を考察の対象とする。RAE (1973: 466), Alarcos (1994: 167), Kany (1970: 199-202), Lapesa (1981[9]: 589-590)なども指摘するように、半島内部でもガリシアやアストゥリアスなど、単純過去形が優勢とされる地域もあるが、当面の考察の対象からは除いておく。

この形式は次のような場合に用いられる(pp. 465-466)。

・"pasado inmediato" つまり、直前に終了した行為を表す[2].
He dicho. 「(演説を終えて)以上です。」

・まだ終了していない時間枠の中で起こった出来事を表す.
Hoy me he levantado a las siete. 「今日私は7時に起きた。」
Este año ha habido buena cosecha. 「今年は豊作だった。」
Durante el siglo actual se han escrito innumerables novelas. 「今世紀の間に無数の小説が書かれた。」

・現在から遠くても、その結果がなお続いている行為を表す[3].
La industria ha prosperado mucho. 「産業が大いに繁栄した。」
(vs. La industria prosperó mucho.)

・時に、現在とのつながりは情緒的(afectivo)なものである[4].
Mi padre ha muerto hace tres años. 「私の父は3年前に亡くなりました。」
(vs. Mi padre murió hace tres años.)

上記の規定では、二形式とも perfecto であり、pasado であるとみなされている。唯一の違いは、単純過去形が絶対的な過去の事象を表すのに対し、現在完了形は現在と関連をもつ過去の事象を表す点にあるとされる。スペインでは、これら二形式の区別は口語でも文語でもよく保たれているという(p. 466)。

(2) Gili Gaya (1993[15])
単純過去形 — pretérito perfecto absoluto
現在完了形 — pretérito perfecto actual

前述の RAE (1973)の記述は、Gili Gaya (1993[15])とほぼ一致している[5]。そこでは、二形式とも tiempos perfectos に分類され[6]、次のように定義される。

---

[2] "nos servimos de este tiempo para expresar el pasado inmediato; (...)"
[3] 以下の例では、現在完了形を用いると今でもそうした繁栄の結果が目に見えていて、今後も続きうることが示され、単純過去形を用いると現在との関連なしに過去の出来事を単に述べているだけとされる。
[4] 以下の例では、現在完了形を用いると現在の感情に影響がおよんでいることになり、単純過去形を用いるとそうした感情を抜きにした単なる報告に過ぎないという。
[5] Gili Gaya は、前述の RAE (1973)の主要部分の執筆者であり、ここでの Gili Gaya (1993[15])の初版は RAE (ibid.)よりも前の 1943 年に出ている(寺崎, 1990: 94)。
[6] "tiempos imperfectos", "tiempos perfectos"の定義は次の通り(Gili Gaya, ibid.: 148-149)。

単純過去形

"nos servimos de este tiempo para las acciones pasadas independientes de cualquier otra acción. Es la forma absoluta del pasado. Con verbos perfectivos expresa la anterioridad de toda la acción: con los imperfectivos, la anterioridad de la perfección." (p. 157)

「この形式は他のいかなる行為からも独立した過去の行為のために用いられる。これは過去の絶対的な形式である。完了動詞の場合、行為全体の前時性を表す。未完了動詞の場合、完了の前時性を表す。」

現在完了形

"En español moderno significa la acción pasada y perfecta que guarda relación con el momento presente. Esta relación puede ser real, o simplemente pensada o percibida por el que habla." (p. 159)

「現代スペイン語では、現在の時点と関連をもつ、過去の完了した行為を意味する。この関連は現実上のものでもありうるし、話者によって単に考えられたり感じられたりしたものでもありうる。」

ここでの見解も、両形式は過去の行為を表すとし、その違いを現在との関連性の有無に求める点で前述のRAEと共通している[7]。

(3) Alarcos (1980[3])

単純過去形 — perfecto simple
現在完了形 — perfecto compuesto

Alarcos (1980[3])によると、ラテン語の完了に由来する単純過去形と、やはりロマンス語以前の時代にさかのぼる現在完了形については、一部のロマンス語に見られるように口語のレベルで後者の使用が増大して前者が実質上使われなくなるといった状況は見られない。現代スペイン語では二形式とも日常的に使用され、区別されて用いられている。もっとも、話者によるこれら二形式の区別は非常に繊細な言語感覚に基づいており、外国人にはとらえ難く、その全局面を明瞭に説明することは難しいともされている(p. 13)。

従来、二形式間の意味的差異については多くの記述がなされてきた。以下、その変遷がまとめられている。ここでもそのいくつかを確認しておこう。

"En los tiempos imperfectos, la atención del que habla se fija en el transcurso o continuidad de la acción, sin que le interesen el comienzo o el fin de la misma.

"En los perfectos resalta la delimitación temporal."

[7] あげられている用法と例は、前述のRAE (1973)とほぼ同じなので省略する(Gili Gaya, ibid.: 157-160 参照)。

(4) Bello (1988, 初版 1847)
単純過去形 — pretérito
現在完了形 — antepresente

Bello (1988: 432-433, 初版 1847)によると、単純過去形は、述部の発話時に対する前時性を表す[8]。この形式と、現在完了形との相違は次のような例の説明に明らかである(p. 436)。

"Roma se hizo señora del mundo" 「ローマは世界の覇者となった。」
"La Inglaterra se ha hecho señora del mar" 「イギリスは海の覇者となった。」

前者では世界制覇は過ぎ去ったこととして示されているのに対し、後者では海上制覇はまだ続いていることが示されている。つまり、複合形の方はいまだ存在する何かと関係を保っている場合に用いられる[9]。Alarcos (ibid.: 15)も述べているように、二形式の区別は Bello による各形式の名称に明瞭に反映されている。すなわち、「(発話時と断絶した)過去」と「発話時に対する前時性」という区別である。

(5) Lenz (1925)
単純過去形 — pretérito
現在完了形 — perfecto

Lenz (1925)は次のような説明により、前述の Bello による区別を明確にしている。すなわち、perfecto によって示される行為の効力もしくは結果は、持続し、現在まで一定の重要性を保ち続ける。一方、pretérito により示される行為は、過去に起こった一時的な現象として表され、それに前後する他の現象に関連付けられるのみである。つまり、発話時や話者とは関連付けられない過去の時点として表される[10]。また、心理的な区別もとり入れて、pretérito

---

[8] Bello (ibid.: 432):
"*Canté*, pretérito. Significa la anterioridad del atributo al acto de la palabra."
ここでの"atributo"は、Alarcos (ibid.: 15)によって"predicado"と解釈されている。

[9] Bello (ibid.: 436):
"La forma compuesta tiene pues relación con algo que todavía existe."
また次のような例もあげて説明している。
"Se dirá propiamente «Él *estuvo ayer* en la ciudad, pero se *ha vuelto hoy* al campo». Se dice que una persona *ha muerto* cuando aún tenemos delante vestigios recientes de la existencia difunta; cuando aquellos a quienes hablamos están creyendo que esa persona vive; en una palabra, siempre que va envuelta en el verbo alguna relación a lo presente."

[10] Lenz (1925: § 257, citado en Alarcos, ibid.: 17):
"el efecto o resultado de la acción indicada por este tiempo (la forma compuesta) persiste y guarda cierta

を客観的な形式、perfecto を主観的な形式とみなしている[11]。

(6) Keniston (1937)

単純過去形 — preterite
現在完了形 — perfect

Keniston (1937: 445)によると二形式は次のように区別される。すなわち、現在完了形は現在において完了している行為あるいは状態を表す。現在とは可変性のある時間なので、この形式が相対的に遠い事象を表すこともありうる。この形式の唯一の本質は、話者や書き手の視点から見て、当該の行為もしくは状態がその人の現在の関心域に入る時点まで拡張していなければならないということである[12]。

こうした論考を概観した後、Alarcos (ibid.: 18-19)は、二形式の区別は次のような要因に基づくとまとめている[13]。

1. 現在完了形は、実行されたばかりの行為、近接した行為、もしくはその結果が現在において現れている行為を表す。
2. 現在完了形は、話し手や書き手の主観的な視点を示し、それは時に純粋に情緒的なものである。

---

importancia hasta el presente, mientras la acción indicada por el pretérito se da simplemente como un fenómeno transitorio, sucedido en tiempo pasado, que sólo se relaciona con otros fenómenos que le precedieron o siguieron, como un momento del pasado que no se pone en relación con el momento en que se habla ni con la persona que habla."

[11] Lenz (1925: § 294-295, citado en Alarcos, ibid.: 17):
"la decisión [entre las dos formas] depende mucho más de la apreciación del que habla que del carácter del hecho pasado"

[12] Keniston (1937: 445):
"The perfect indicative indicates an action or a state which is completed in the present. Since the present is a variable period, the perfect may be used to indicate events which are relatively remote, the only essential being that from the point of view of the speaker or writer the action or state in question must extend to a point which falls within his present interest."

[13] Alarcos (ibid.: 18-19):
"1.° El perfecto compuesto indica una acción que acaba de efectuarse, una acción próxima o una cuyos resultados o consecuencias se manifiestan en el presente; 2.° El perfecto compuesto indica un punto de vista subjetivo en la persona que habla o escribe, de carácter a veces puramente afectivo."

また別の箇所でも[14]、単純過去形は、過去に生じかつその過去の中で限界をもつ出来事を表すのに対し、現在完了形は、文法的現在に接近する行為、すなわち「拡張された現在」[15]の中で生じた行為を表すと述べている。この「拡張された現在」とは、過去のある時点と、話したり書いたりしている「今」を結ぶ時間枠をさす。二形式の区別は、ある行為が文字通りの意味で近いか遠いかを示すことにあるのではなく、その行為が生じた時間枠の中に文法的現在が含まれるか否かを示すことにあるとする。特に上記の「拡張された現在」は現在完了形の記述にとって重要な概念であり、本論文で後におこなう考察においてもしばしば言及することになる。

ところでAlarcos (ibid.: 46)は、現在完了形について、この形式の機能が歴史的にたどった推移として以下の四段階をあげ、これらの意味は現代語でも活力を保っているとしている[16]。

1) Expresión de la duración presente del resultado de una acción anterior.
「以前の行為の結果が現在も継続していることの表現」
2) Expresión de la acción continuada [durativa o iterativa] que ha producido un estado presente (...).
「現在の状態を生み出した継続的・反復的行為の表現」
3) Expresión de una acción momentánea inmediatamente anterior al presente gramatical.
「文法的現在の直前に生じた瞬時的行為の表現」
4) Expresión de una acción momentánea no inmediatamente anterior, pero sentida en relación con el presente, es decir, producida en el 'presente ampliado'.
「直前ではないが、現在と関連のあるものとして感じられた行為、すなわち、『拡張された現在』において生じた瞬時的行為の表現」

これらの用法はそれぞれ 1)「結果状態」、2)「継続・反復」、3)「直前の完了」、4)「拡張

---

[14] Alarcos (ibid.: 32-33):
"El perfecto simple designa un hecho sucedido en el pasado y que tuvo un límite en ese mismo pasado; (...)"
"El perfecto compuesto siempre designa una acción que se aproxima al presente gramatical, esto es, que se produce en el 'presente ampliado', en un período desde un punto del pasado hasta el 'ahora' en que se habla o escribe." "Por ello, repetimos, el uso del perfecto simple o del compuesto no indica que la acción sea próxima o remota en el sentido absoluto de estas palabras, sino que ambas formas verbales señalan si el período de tiempo en que la acción se produce incluye o no el presente gramatical."

[15] Alarcos (ibid.: 28-29)はこの"presente ampliado"という概念を次のようにも説明している。
"(...) El presente es una fracción de tiempo abstracta, y el presente gramatical, como es sabido, está constituido no por un punto, sino por una línea formada por la proyección de varios sucesivos presentes abstractos. Esta línea ideal del presente gramatical entra, por tanto, en el campo del pasado (...) Así, el perfecto compuesto nos da la idea de un presente ampliado hacia el pasado (...)"「現在とは抽象的な時間の断片であり、文法的現在とは一点ではなく、いくつかの連続した抽象的現在の投影によって形成された線である。したがって、この文法的現在の観念的な線は過去の領域に入り込む。(...) それゆえ、現在完了形は過去に向けて拡張された現在の観念をもたらすことになる。」

[16] もっとも、1)の「結果状態」の意味は今日ではまれで、「tener＋過去分詞」という迂言形にとって代わられつつあるという。

された現在の完了」として、本論文で後におこなう調査でもとり入れていく[17]。

(7) 高橋 (1967)

単純過去形 — 不定過去
現在完了形 — 完了過去

高橋 (1967)(『新スペイン広文典』)では、二形式の意味は次のようにとらえられている。

まず、単純過去形については、これを未完了過去形との対比で「不定過去は、不完了過去が«線の過去»であるに(ママ)対して、«点の過去»といえる。過去の一時に動作や状態が行なわれて終わったことを表す」(p. 297)としている。また、「たとえ継続的な動作や状態であっても、話者の心裡で、過去の一時にあったものとして語るとき、また現在までの経験とみえても、現在と切り離して感じるとき、この過去が使われる」とも述べている。

一方、現在完了形については、「この形は pretérito といいながら、助動詞の方が現在形だから、むしろ現在の枠にはいる」(p. 291)とし、次のような用法をあげている(日本語訳は高橋 (ibid.)による)。

① 動作や行為が終了した現在の状態を表わす. (...)

Han llegado Juan. 「フアンが来た。—来ている。」
No ha llegado el paquete. 「小包はまだ来ない。—来ていない。」
¡Ah, lo *he sabido*! 「ああ、分かった！(思いついた)」
¿*Han traído* mi traje nuevo? 「私の新しい服を持って来てあるか?」
Sí; se lo *he subido* arriba. 「ええ、上へ持ってあがっときました。」

② 動作や行為が終わって、その結果が現在に及んでいる感じの表現、したがって、現在までの経験を表わすこともある.

Desde entonces *ha prosperado* mucho la industria. 「その時以来、工業が非常に栄えている。」
Los griegos nos *han dejado* el arquetipo de la tragedia antigua. 「ギリシャ人が古代悲劇の典型を現在に残している。」
Mi padre *ha muerto* hace tres años. 「3年まえに父に死なれました。」
Te *he envidiado* más de una vez. 「一度ならず君を羨ましく思ったことがある。」
Nunca *hemos estado* en París. 「私どもはパリへ行ったことがない。」

③ 本日・本週・今月・今年など、ひとつの時間単位のうちにあったことをいう(...)

Esta mañana *me he levantado* a las siete. 「けさ私は7時に起きた。」
Este año *ha habido* buena cosecha. 「今年は豊作だった。」

---

[17] 2.4.2.参照。

Este mes *hemos recibido* dos cartas de los padres. 「今月私たちは両親から2度、便りをもらった。」

④ 現在形や過去形で書いた文章でも、事が終了したことを一般論的な経験として述べる (...)
Es de creer que cuando se transforma el exterior *ha variado* algo en el interior.
「外側の形が変わったときには内部でもなにかが変化していると考えてよろしい。」

⑤ ある実現性のある仮定のもとで、近い未来に事が終了しているはずのことを表す (...)
Mañana quizá *ha cambiado* nuestra suerte.
「あしたになれば、おそらく、おれたちの運命はがらりと変わっているさ。」

これらのうち④と⑤は、この形式の基本的な意味から派生する二次的な用法とみられるので当面の考察からは外すとして、その他のいずれの用法も、「発話時との関連性」を何らかの形で表していると言える。

(8) 西川 (1995)
単純過去形 — 点過去
現在完了形 — 現在完了

西川 (ibid.: 320) (『中級スペイン文法』)は、現在完了形についての記述の中で、二形式の差異を次のように説明している。

「直説法現在完了は過去の行為を表現する絶対時制であり、しかも完了相であるという点では点過去と同じである。両者の違いは、遠い過去(点過去)と近い過去(現在完了)という対立のほかに、点過去は、話し手が現在とは切り離された過去の時間帯において既に終わった行為であると考えているのに対して、現在完了で表わされる行為は、話し手がまだ終わっていない時間帯(心理的な面も含めて)において展開されていると意識している。ここから過去時における完了相を有する時制であるにもかかわらず、現在時、ときには未来時に及ぶ用法が生まれてくる。」

二形式の時制的特徴(過去か現在か、絶対時か相対時か)やアスペクト的特徴の検討は後におこなうとして、ここでの記述も、二形式の差異を「発話時との関連性の有無」に見い出す点では、これまでに見てきた記述と一致している。

(9) まとめ

以上、二形式の基本的な意味の違いについての従来の記述を概観してきた。ここでとりあげた見解は、二形式の区別についておおむね一致している。単純過去形は発話時と断絶した絶対的な過去を表し、現在完了形は発話時と関連をもつ前時性を表すという区別にほぼ要約できよう[18]。こうした定義は、二形式の区別の本質部分をよく表しており、その有効性は今なお失われていない。もっとも、二形式の意味規定に用いられているいくつかの概念を明確にし、二形式を時制体系全体との関連で位置付けておくことも必要である。二形式の区別に密接に関わってくる概念としては、時制的概念、アスペクト的概念があげられる。その他の研究における記述も含め、次節以降で確認していくことにする。

1.2. 二形式の時制的・アスペクト的特徴

1.2.1. 各概念の定義

まずは、「時制」と「アスペクト」という二つの文法的範疇について、従来の定義を確認しておこう。

Comrie (1981: 5)は、これら二つの概念の違いを次のように説明している。

> "However, although both aspect and tense are concerned with time, they are concerned with time in very different ways. As noted above, tense is a deictic category, i.e., locates situations in time, usually with reference to the present moment, though also with reference to other situations. Aspect is not concerned with relating the time of the situations to any other time-point, but rather with the internal temporal constituency of the one situation; one could state the difference as one between situation-internal time (aspect) and situation-external time (tense)."
>
> 「アスペクトもテンスもともに時間とかかわっているのだが、しかしそのかかわり方はまったくことなっている。まえにのべてあるように、テンスは指示的なカテゴリーである。つまり、テンスは、ふつうは現在の瞬間に関係づけることによって、場面を時間のなかに位置づけているのである。もっとも、もうひとつの、べつの場面に関係づけることによって、場面を時間のなかに位置づけることもあるのだが。しかしアスペクトのほうは、ほかのなんらかの時点に場面の時間を関係づけるようなことはしない。それはむしろひとつの場面の内的な時間構成にかかわっている。このちがいは、場面の内的な時間(アスペクト)と場面の外的な時間(テンス)とのちがいである、ということができるだろう。」(山田訳, p.14)

---

[18] 時制研究における二形式の相違説明の変遷は、西川 (1996, 2001)に詳述されている。そこでも、19 世紀以降(具体的には Salvá (1830) *Gramática de la lengua castellana* 以降)のスペイン語文法において、「発話時との関連の有無」を二形式の意味的相違の本質とする論考が主流となったことが述べられている(西川 1996: 154-157)。

こうした違いは次の寺崎(1998: 29)でも述べられている。

「時制とは動詞の表す事象を外界の時間に関連づける文法範疇で、動詞の屈折によって実現される。時制の本質は、事象を発話時点、つまり発話が行われている現在の時点に関連づけることにあるので、直示的な機能を持つ。」

「相またはアスペクトとは、動詞の表す事象の内的な時間構成を話し手がどのように眺めているかを示す文法範疇である。時制と違って発話時点との関係は示さないので、直示的ではない。」

以下で、各概念をもう少し詳しく見ていこう。

(1) 時制

言語的時間は、物理的時間や年代的時間の枠内でとらえられるとはいえ、そのどちらとも性質を異にするものである[19]。Rojo & Veiga (1999: 2872-2874)によると、temporalidad lingüística は、tiempo físico や tiempo cronológico と区別され、次のような特徴をもつとされる。

a) ゼロ時点(punto cero)の設定に基づく。この時点は(必ずというわけではないが)普通は発話時と一致する。
b) 物理的時間が線状性と不可逆性をもつのに対し、言語的時間は、中心時点(punto central)もしくはその中心時点と関連付けられる他の時点からみて、以前、同時、以後の領域に事象を位置付けることに特徴がある。すなわちその本質は、ゼロ時点に対して事象を直接的・間接的に方向付けること(orientación)である。
c) 言語によっては、ゼロ時点からの距離の表現が文法化されていることもある。

文法的な時制と現実の時間との関係については多くの研究がなされてきたが、その関係は厳密なものではなく、規定するのは必ずしも容易ではない。例えばスペイン語の現在時制は、ある文脈では未来にも言及できる(p. ej. Tengo un examen mañana.)。また時制形式は、時制的な意味以外に転用されることもある。例えばスペイン語では、未来形は蓋然性を表すためにも用いられる(p. ej. Serán las doce = 'deben de ser las doce') [20]。

---

[19] Alarcos (1994: 155-158)はこの点を考慮して、スペイン語で「時間」と「時制」の両方の意味で用いられる tiempo という語を「時制」のために用いず、perspectiva temporal という用語を採用している。

[20] Crystal (2000) s.v. tiempo:

"En LINGÜÍSTICA, la relación entre el tiempo gramatical y el tiempo real ha provocado numerosos estudios y

伝統的には、時制という範疇を構成する概念として「過去 / 現在 / 未来」という三分法や、「過去 / 非過去」という二分法がとられてきた。また、別のアプローチでは、こうした伝統的な区分を用いずに時制体系をとらえる試みもなされてきた。これについては、スペイン語について後におこなう考察でとりあげる。

(2) アスペクト

アスペクトのとらえ方にもいくつかの可能性が考えられる。一つには、この概念を狭義にとらえる立場がある。そうした立場から、スペイン語にアスペクトの存在を認めないとする論考もある。原 (1979: 97)は、スペイン語にこの範疇を認めるか否かを検討するにあたり、この範疇がロシヤ語の「体」の概念に由来することに基づき、認定のため条件として次の二点を設定している。

(i) アスペクトなる文法範疇はスペイン語において明示的な形で動詞の単一な形に現れていなければならない。従ってもしそれが非網羅的な意味的範疇であるならば、筆者はアスペクトをスペイン語に認める必要を認めない。

(ii) アスペクトなる文法範疇はすべてのスペイン語の動詞にわたって形の上で網羅的でなければならない。

そしてスペイン語では、すべての動詞形式に網羅的かつ形式的にアスペクトが明示されるわけではないことから、同言語にはこの文法範疇は設定不要であると結論している。

こうした厳密なアスペクトの定義によれば確かにスペイン語にはそれにあたる範疇はないと言える。とはいえここでは、後に見るように、この概念を用いることで時制的特徴だけでは規定しがたい対立や現象が記述できるようになるという点を重視して一部とり入れていくことにする[21]。

一般に、アスペクトはその表示のされ方によっていくつかに分類できる。スペイン語の動詞の場合、よく行われるのは動詞固有の意味によるアスペクトと、動詞の屈折や文法的接辞

---

actualmente está claro que no existe una relación fácil de formular entre ambos. Las FORMAS temporales (...) se pueden usar para expresar SIGNIFICADOS distintos de los temporales. En español, por ejemplo, el uso del futuro para expresar probabilidad (p. ej. Serán las doce = 'deben de ser las doce'). Tampoco existe una relación exacta entre formas temporales y tiempo real: el tiempo presente del español puede hacer referencia al futuro en algunos CONTEXTOS (p. ej. Tengo un examen mañana). (...)"

このように、時制と他の動詞機能(法など)には重なる部分があり、分析を困難にする要因となっている。

[21] スペイン語文法の伝統におけるアスペクトの位置付けついては、Quesada Pacheco (2001: 6)で説明されている。

の付加によるアスペクトの区別である。

前者のアスペクトは、Aktionsart と呼ばれるものに相当し、RAE (1973: 461)では clase de acción verbal と呼ばれ次のように規定されている。

> "La clase es, pues, la imagen o representación mental de la acción, y es inherente al significado de cada verbo. Su naturaleza es semántica; carece de morfemas propios que la expresen, con lo cual se diferencia claramente de los modos del verbo."
>
> 「この類は、行為のイメージもしくは心的表象であり個々の動詞の意味に固有のものである。その性質は意味的なものであり、それを表示する固有の形態素に欠けている。この点で動詞の法とは明瞭に区別される。」

もう一つのアスペクトは、同じく RAE (ibid.: 461)によって aspecto de la acción verbal と呼ばれ、次のように説明されている。

> "Entre las modificaciones que el contexto imprime en cada caso al significado del verbo, ocupan lugar relevante los medios gramaticales que el idioma emplea para ello. Estas modificaciones son morfológicas o perifrásticas; y reciben el nombre de *aspectos* en cuanto pueden reforzar o alterar la clase de acción que cada verbo tiene por su significado propio."
>
> 「個々の場合に文脈が動詞の意味に与える修飾の中で、言語がそのために用いる文法的手段は卓越した地位を占める。これらの修飾は形態的もしくは迂言的なものであり、個々の動詞が固有の意味によりもっている動作態を強めたり変容させたりするという点でアスペクトと呼ばれる。」

つまり、clase de acción verbal は個々の動詞の意味に固有のアスペクト、aspecto de la acción verbal は文法的手段によるアスペクトと言える。後者のアスペクトには、再帰代名詞の付加や迂言形、動詞の時制形式によるものが含まれる[22]。以降、前者を「語彙的アスペクト」(もしくは「動作態」)、後者を単に「アスペクト」と呼び区別していく[23]。次節では、時制とア

---

[22] RAE (ibid.: loc. cit.)は文法的な手段によるアスペクトの例として、動詞 enojar や dormir が再帰代名詞の付加により起動相(aspecto incoativo)を表すようになる場合や、動詞句(locuciones verbales: ir saliendo, entrando, leyendo, comiendo など)が進行相(progresivo)、継続相(durativo)、完了相(perfectivo)などの aspectos de la acción を表す場合をあげている。また、動詞の時制形式も、perfectivo と imperfectivo のアスペクト的意味をもつとする。この最後の場合については後に詳しく検討する。

[23] これらの概念については、異なる区別がなされることもある。

Quesada Pacheco (2001: 7)では、Aktionsart にあたるものが modos de acción と呼ばれ、Quesada (1993: 101)に従い次のように定義されている。

> "se define, (...), como la percepción o representación de estados de cosas y tiene su campo de acción en el nivel léxico a través del proceso de la derivación y de la perífrasis, como se puede ver en los siguientes ejemplos: "
>
> 「事態の認識もしくは表象として定義され、次の例に見られるように、派生や迂言法のプロセスによる語彙的なレベルにその活動領域をもつ。」
>
> (1) *los campos **florecen** en primavera* 「野原は春に花を咲かせる。」
>
> (2) *los niños **acaban de llegar** de la escuela* 「子供たちは学校から帰ってきたばかりだ。」

スペクトの関係に焦点を当てて二形式を規定していく。

1.2.2. 時制的特徴とアスペクト的特徴

さて、1.1.で概観した通り、単純過去形と現在完了形は基本的には「発話時と断絶した過去」と「発話時に対する前時性」として区別されるが、こうした規定においては、前節でとりあげた時制やアスペクトの概念が用いられるのが一般的である。実際、1.1.で参照した記述でもこれらの概念に関わる用語が用いられていた。ここでは、いくつかの記述における二形式の時制的・アスペクト的位置付けを見ることで問題の所在を確認した後、本論文での位置付けを明確にする。同時に各形式と時制体系全体との関係も考慮に入れていく。

1.2.2.1. 問題の所在

1.1.で見た記述の中には、両形式の定義に用いられ、時に形式間の意味的区別を不明瞭にしている用語がある。それは RAE (1973)、Gili Gaya (1993[15])に見られる“pretérito (pasado)”, “absoluto”, “perfecto”, “anterioridad”や、Bello (1988)に見られる“anterioridad”などである。これらの概念を中心に以下で整理していこう。

この定義では、(Aktionsart に相当する) modos de acción に、派生などの形態的手段によるアスペクトのみならず、迂言形によって示されるアスペクトも含められている。前述の RAE (1973)では、迂言形によるアスペクトは他方の aspecto de la acción verbal に含められていた。ここで現在完了形の位置付けが問題になるが、本論文では RAE に従い、「語彙的アスペクト」対「(時制形式、迂言形式を含む)文法的アスペクト」という二分法をとり、単純過去形と現在完了形のアスペクトはどちらも時制形式として後者に属すると考える。

広義の語彙的アスペクトとしては、これを文全体のアスペクトに敷衍する見方(de Miguel, 1999)が、高垣 (2000)によって紹介されている。そこでは、(動詞に限らず)文を構成する個々の要素(狭義の語彙アスペクト、動詞の補語名詞句のアスペクト情報、動詞句の情報、主語名詞句の情報、修飾要素[動詞の屈折、時の副詞類など]) が文全体のアスペクトを決定するとされる。

制限的な区分としては、Aktionsart を派生によって語彙化されたものに限る立場もある。Comrie (1981: 6 [n.4]; 9 [n.1])も参照のこと。

アスペクトとして扱われるべきものの類型については、Comrie (1988: 224-225)で解説されている。また、Quesada Pacheco (2001)の中で、Marco (1988), Holt (1946), Quesada (1993)によるものが紹介されている。

(1) "pretérito (pasado)", "perfecto"

RAE (1973)において、単純過去形は pretérito perfecto simple、現在完了形は pretérito perfecto compuesto と呼ばれ、両形式に pretérito および perfecto という用語が用いられている。こうした扱いは用語だけにとどまらない。その定義でも、単純過去形は"un tiempo pasado, absoluto y perfecto" (p. 468)である一方、現在完了形は"la acción pasada y perfecta que guarda relación con el presente"を表すとされ(p. 465)、pretérito (pasado)と perfecto は、両形式に共通する特徴として見なされている。こうした特徴付けを、RAE (ibid.)による時制体系全体の規定との関連でとらえなおしてみよう。

まず時制的位置付けであるが、ここでは伝統的な時制区分(現在、過去、未来)が用いられており、二形式はどちらも pretérito (pasado)、つまり過去時制と見なされている。

一方の perfecto はアスペクト的特徴を示している。前述の通り RAE (ibid.: 461-462)はアスペクトをスペイン語に認めているが、この概念を時制体系全体に適用し、時制形式を tiempos imperfectos と tiempos perfectos に二分している。そして、単純過去形と現在完了形をどちらも完了時制に含めている。RAE (ibid.: loc. cit.)によると、未完了時制と完了時制はそれぞれ次のように定義される。

<u>tiempos imperfectos</u>

"En los tiempos imperfectos, la atención del que habla se fija en el transcurso o continuidad de la acción, sin que le interesen el comienzo o el fin de la misma."

「未完了時制では話者の関心が行為の経過や継続におかれ、その行為の開始や終了にはおかれない。」

<u>tiempos perfectos</u>

"En los perfectos, resalta la delimitación temporal."

「完了時制では時間的画定が際立つ。」

未完了時制には単純過去形を除くすべての単純時制が含まれ(canto, cantaba, cantaré, cantaría, cante, cantara o cantase, cantare)、完了時制には単純過去形とすべての複合時制が含まれる。例えば、未完了過去形の cantaba は未完了の行為であるのに対し、he cantado は発話時において終了もしくは完了した行為を表すとする。

(2) "anterioridad"

この用語を前述の RAE (1973: 468)は、単純過去形の定義に用いている。それによると単純過去形は、語彙的アスペクトの種類によって、行為全体もしくは行為の完了の anterioridad を

表すとされる[24]。

また、Bello (1988: 432-433)もこの anterioridad を単純過去形の定義に用いている。

"*Canté*, pretérito. Significa la anterioridad del atributo del acto de la palabra."

「*Canté* 過去。発話行為に対する、属辞の前時性を表す。」

もっとも Bello (ibid.: 435)は、anterior という語を複合時制の相対的な前時性を言うためにも用いている。

"el tiempo significado por la forma compuesta es anterior al tiempo del auxiliar."

「複合形によって示される時は、助動詞の時よりも前である。」

前者では時制的特徴として、後者ではアスペクト的特徴として用いられているようであるが、いずれにしてもこの概念の規定は不明瞭である。

(3) "absoluto"

この用語は絶対時、相対時の別を問題にしていると思われる。RAE (1973: 468)と Gili Gaya (1993[15]: 157)は、この語を単純過去形の定義に(Gili Gaya についてはその名称の中でも)用いている。

実際、RAE (ibid: 462-463)は、絶対時制(tiempos absolutos)と相対時制(tiempos relativos)を次のように定義し、時制体系を二分している[25]。

<u>tiempos absolutos</u>

"Se llaman tiempos absolutos los que, medidos desde el momento en que hablamos, se sitúan por sí solos en nuestra representación como presentes, pasados o futuros, sin necesitar conexión alguna con otras representaciones temporales del contexto o de las circunstancias del habla. Son tiempos directamente medidos desde nuestro presente"

「発話時点を起点に計られ、それ自体で我々の表象の中に現在、過去、未来として位置付けられる時制で、文脈や話の状況による他の時間的表象といかなる関連付けも必要としない時制を絶対時制という. それらは我々にとっての現在から直接的に計られる時制である。」

<u>tiempos relativos</u>

"Los restantes tiempos de la conjugación son relativos o indirectamente medidos, porque su situación

---

[24] 本論 1.1.(1)参照。

[25] この分類は Gili Gaya (ibid.: 150-151)と一致している。もっとも RAE (ibid: 462-463)では、ここでの分類は互いを排除しあうような絶対的なものではなく、具体的な個々の時制使用を説明するための一つの指針という位置付けがなされている。

en la línea de nuestras representaciones temporales necesita ser fijada por el contexto, y especialmente por medio de otro verbo o de un adverbio con los cuales se relaciona."

「その他の時制形式は相対的もしくは間接的に計られる時制である. というのも、我々の時間的表象の線上にそれらを位置付ける際には、文脈、とりわけ、関連する他の動詞や副詞によって定められる必要があるからである。」

その分類によると、絶対時制として用いられることが多いのは、現在形、単純過去形、現在完了形、未来形とされる[26]。これら時制の言及時点(punto de referencia)は発話時(acto de la palabra)である。

一方、相対時制とされているのは残りの時制形式である[27]。例えば、"cantaban"や"había estudiado"という文を、明示・非明示に関わらず時間的な状況への言及なしに発することは意味をなさないとされる。

(4) 問題の所在

以上の記述を見る限り、次のような問題点をあげることができる。

RAE (1973)が述べるように、現在完了形は単純過去形と同様に、時制的には過去、アスペクト的には perfecto という特徴をもつと考えるべきであろうか。二形式が共有しているとされるこれらの特徴は同質のものなのだろうか。また、anterioridad や絶対 / 相対時制の位置付けはどうあるべきか。Anterioridad は単純過去形に適用すべき特徴なのだろうか。現在完了形は絶対時制と考えるべきであろうか。次節では他の研究を参照しつつ、これらの問題を検討する。

1. 2. 2. 2. 各形式の時制的・アスペクト的特徴

スペイン語の時制体系を記述する際、時制的・アスペクト的特徴の適用の方法にはいくつか可能性がある。単純過去形と現在完了形について、前述の RAE (1973)は、二形式の共通点を示すことを重視し、二形式に同じ時制的価値(過去)とアスペクト的価値(perfecto)を認めている。一方、両者の相違点は「発話時との関連性の有無」として個別的に言及されるのみである。

スペイン語の現状を考えた場合、Alarcos (1980[3]: 13)も指摘するように、これら二形式は日

[26] さらに命令形もここに加えられている。

[27] 接続法については、従属節の場合は相対時、独立文の場合は絶対時とされる。

常的に区別されて用いられ、各形式は各々の意味領域を保っている。一方が他方と等価の形式として使用されることは、(周辺的な用法を除けば)ないと言ってよい[28]。二形式の共通点を強調するあまり、時制的・アスペクト的特徴の規定の中で重要な意味的差異が明示されない点はやはり問題と言えよう。

それに対して、両者の相違点を時制的・アスペクト的位置付けの中で積極的に示していこうとする立場もある。以下ではそうした立場をとる論考をとりあげる。

(1) Alarcos (1994)

Alarcos は、時制的区分としては presente と pretérito からなる二分法をとっている[29]。単純形の時制的・法的位置付けは次のようになる(p. 158)。

---

[28] Bull (1968)によると、ある種の用法について二形式は free variant として用いられるという。ただし、Bull がこれらの自由変異的な使用を認めているのは nonsystemic function、つまり、本来の機能から逸脱する機能においてのみである。まず、現在完了形が用いられるのが普通とされる文脈で単純過去形が用いられている例をあげている。

"En este momento se fue un estudiante que le buscaba." 「彼を探していた学生はつい今しがた行ってしまった。」

"Estos últimos días anduvo taciturno." 「ここ数日彼は黙り込んでいる。」

"Cuidado pues, como te echas una broma. ¿Oíste?" 「冗談を言う時には気を付けろ。聞こえたのか?」(p.97)

一方、現在完了形が単純過去形の free variant になる場合として、

"El año 1983 ha sido el más frío de todos." 「1983 年は全ての年の中で最も寒かった。」

"En 1930 la temperatura ha quedado la misma." 「1930 年に気温は同じになった。」(p.87)

などの例をあげ、多くのスペイン語話者は、もはや助動詞の axis marking function (基準時点の表示機能)に反応しなくなっているとしている (p.88)。

Porto Dapena (1989)も、二形式の対立が保たれているとされる規範的スペイン語においても、この対立がなくなる場合があると述べている(pp.64-65)。ただし、それが起こる環境は限定されていて、交替の条件をはっきり定めるのは難しいとしている。例としては、現在完了形の代わりに単純過去形が用いられている次のような例をあげている。

"¡Se acabó! No discutamos más." 「もう終わりだ。これ以上議論するのはよそう。」

"Llegó, por fin, esta mañana." 「ついに今朝彼が到着した。」(p.69)

一方、Bull と異なり、逆は不可であるとしている。つまり、現在完了形の出現に必要な inmediatez al presente と resultado en el presente のいずれかの文脈があれば単純過去形で置き換え可能であるが、単純過去形を現在完了形で置き換えることはできないとする。

Bull があげている現在完了形の使用については、果たしてこれが本当に単純過去形の代わりをしているのかは疑問である。心理的な近さを表すために、意識的にこの形式が選択されている可能性もある。

また、Porto Dapena が指摘する単純過去形の自由変異的使用は、そのイディオム的性質を考えて、この形式の本質的な価値からは区別しておく必要があるだろう。Barrera-Vidal (1972: 227-228)参照。

[29] ここでは時制は perspectiva temporal と呼ばれ、出来事を位置付ける話者の視点としてとらえられている。現在時制は perspectiva de presente o de participación、過去時制は perspectiva de pretérito o de alejamiento とも呼ばれる(p. 157)。また、伝統的な時制の三区分に見られる「未来」は設定されない。未来形、過去未来形(及び対応する複合形)は、その時制的使用よりも法的使用における共通性が重視され、condicionado という個別の法の、それぞれ現在、過去として位置付けられる。

PERSPECTIVA	MODOS		
	Indicativo	Condicionado	Subjuntivo
Presente	cantas	cantarás	cantes
Pretérito	cantabas cantaste	cantarías	cantaras cantases

一方、複合形については次のように体系化されている(p. 164)。

PERSPECTIVA	MODOS		
	Indicativo	Condicionado	Subjuntivo
Presente	has cantado	habrás cantado	hayas cantado
Pretérito	habías cantado hubiste cantado	habrías cantado	hubieras cantado hubieses cantado

こうした時制・法体系の規定から、二形式の特徴を抜き出してみよう。

まず、時制的特徴に注目する。ここでは、単純過去形は過去時制、現在完了形は現在時制ととらえられている点で、どちらも過去時制とする前述の RAE (1973)の立場と異なっている。つまり、時制的特徴でまず二形式は区別される。

次に、各形式のアスペクト的特徴に注目してみる。単純過去形については、terminativo とされ、no terminativo の特徴をもつ未完了過去形と対立する。これらの特徴は伝統的な perfectivo o puntual / imperfectivo o durativo の対立に相当し、terminativo は動詞語根によって示される概念の完結を表す。この特徴はこれら二形式の対立にのみ用いられ、RAE (1973)における perfecto / imperfecto の特徴のように時制体系全体に適用されることはない[30]。

一方、現在完了形のアスペクト的特徴は、単純時制対複合時制という対立の中でとらえられる。それによると、複合時制は anterioridad により、単純時制と対立する。この特徴は、動詞語根によって表される概念を、対応する単純形が示す時点よりも前の時間に位置付けることとされる。したがって現在完了形の場合は、対応する現在形が示す時点よりも前に、動詞の概念を位置付けると言える。この点で、anterioridad を単純過去形の規定に用いていた前述の RAE と異なっている[31]。

以上のような特徴付けによると、二形式の区別は明瞭に示される。確かに、二形式は共に

[30] Alarcos (ibid.: 160-162).
[31] Alarcos (ibid.: 164-166).

発話時以前の出来事を表すことができるが、それを可能とする時制的・アスペクト的特徴は各形式で異なっている。単純過去形は時制的に過去であるためにそれが可能である一方、現在完了形は時制的には現在だが、anterioridad をもつためにそれが可能なのである(pp. 166-167)。

この anterioridad (「ある時点よりも前で、それと関連をもつ」)という特徴は、Bello (1988: 435) によっても複合時制の規定に用いられていた特徴である。「相対時制」を、基点になる時点との相対的な時間関係を表す時制と考えれば、複合時制は全て相対時制ということになる[32]。この点でも、現在完了形を絶対時制に含める RAE (1973)とは異なる。

(2) 寺崎 (1975, 1998)

前述の Alarcos (1994)と同様、各形式の違いを時制的・アスペクト的特徴における違いとして積極的に示す立場として寺崎 (1975, 1998: 29-37)があげられる。

まず時制的特徴については、「＋過去」対「－過去」の二分法がとられ、単純過去形は前者、現在完了形は後者の特徴をもつとする。

次にアスペクト的特徴については、「完結性の相」の対立を直説法過去時制にのみ認め、「前時性の相」の対立を複合形と単純形の間にのみ認める。

このうち「完結相」(+terminativo)は、「ある事象を一まとまりの分割できない全体としてとらえ表現する」特徴、「未完結相」(－terminativo)は「展開中の一局面でとらえ表現する」特徴で[33]、前者をもつ単純過去形と、後者をもつ未完了過去形が対立する。

一方「前時相」(+anterior)は、「時間的な相対関係(言及時点よりも前に起きたこと)」を示し、この特徴をもつ複合形と、そうした関係を示さない単純形が対立する。この特徴は「かなり時制に近い概念であるが、時制と違って発話時点との関係は示さない」ので、アスペクト的特徴と見なされている[34]。

---

[32] Alarcos (1980[3]: 35)も次のように述べている。
"Creemos, al contrario que Gili, que hay que incluir el perfecto compuesto entre los tiempos relativos. De la misma manera que el pluscuamperfecto (*había cantado*) y el futuro compuesto (*habré cantado*) son tiempos relativos, medidos desde el pretérito y desde el futuro absolutos, respectivamente, el perfecto compuesto (*he cantado*) es un tiempo relativo, puesto que expresa una relación con el presente y no simplemente una acción sucedida absolutamente en el pasado. El perfecto compuesto es, pues, relativo y se mide no como los tiempos absolutos (esto es, desde la conciencia presente), sino desde el presente gramatical." 「Gili の見解と異なり、ここでは現在完了形を相対時制の中に含めるべきであると考える。過去完了形(*había cantado*)と未来完了形(*habré cantado*)が各々絶対的過去と未来から計られる相対時制であるのと同様に、現在完了形(*he cantado*)も相対時制である。というのも、単に過去において絶対的に生じた行為ではなく、現在との関係を表すからである。つまり、現在完了形は相対時制であり、絶対時制のように、現在の認識からではなく、文法的現在から計られるのである。」

[33] 寺崎 (1998: 29, 32-34).

[34] 寺崎 (ibid.: 29).

以上に基づき、直説法の現在時制と過去時制は次のように体系化される[35]。

アスペクト的特徴 ＼ 時制的特徴	ー前時		＋前時	
	ー完結	＋完結	ー完結	＋完結
ー過去	tomo		he tomado	
＋過去	tomaba	tomé	había tomado	hube tomado

ここでも、二形式は時制的・アスペクト的に区別され、各形式の相違点も前述の Alarcos (1994)と一致している。

(3) まとめ

最後に、二形式をアスペクト的にも時制的にも区別する立場の利点を挙げてみる。この立場は、二つのアスペクト的特徴(「完結性」、「前時性」)を部分的にとり入れ、それらのアスペクト的特徴と時制的特徴の和として各形式を規定し、形式間の相違を明示しようとするものと言える。二形式は共に過去の事象に言及できるとはいえ、それは二形式が同じ「過去」という時制的特徴と「完了」というアスペクト的特徴を共有しているからではなく、単純過去形については[＋過去, ー前時, ＋完結]という特徴、現在完了形については[ー過去, ＋前時]という特徴の組み合わせにより可能になるとする。

これにより、両形式に同じ特徴を付与する場合に生ずるいくつかの不都合が避けられる。それはまず、RAE (1973)のように現在完了形を「過去」時制、「完了」アスペクトとする場合に生ずる。現在完了形は、基本的には発話時と関連をもつ前時性を表すとはいえ、それが実現する用法に注目した場合、確かに「過去」的で「完了」的な用法もある[36]一方で「発話時に至る継続・反復」、「発話時における結果状態」など、発話時まで開いた事象を表す場合もある。この点で、この形式を「過去」および「完了」とするには抵抗がある。しかしながら、+anterior (「発話時よりも前で、それと関連をもつ」)と規定することで、発話時までの時間枠が想定され、「完了」的な用法もそうでない用法も全てそこに含めることができる。

また、RAE (1973)のように「完了」対「未完了」という対立を全時制に適用した場合、「完了性」というアスペクト特徴の輪郭は、多くの時制形式の多岐にわたる価値を包摂しようとするあまり、不明瞭になってしまう。その点、この対立を過去時制にのみ有効な対立とする

[35] 寺崎 (1975: 103, 1998: 29)をもとに一部改変した.

[36] 例えば直前(もしくは拡張された現在)に完了した出来事を述べる場合(p. ej. Hoy me he levantado a las siete「今日私は7時に起きた」)など。

ことで、「完了」「未完了」の概念はそれぞれ単純過去形と未完了過去形の価値の相違と限定することができる。

以上のような利点を重視し、ここでは、二形式を時制的にもアスペクト的にも異なる価値をもつ形式として考えることにする。

1.2.2.3. その他の論考

前述の通り、基本的に本論文では、二形式の規定に時制的・アスペクト的特徴の両方を用い、二形式はこれらの特徴の違いによって区別されるとする立場を支持していく。

もっとも、これと異なるアプローチによって二形式の差異を規定しようとする立場も存在する。ここでは、そうした立場を二つとりあげ確認しておこう。

(1) 時間的関係 (relación temporal)に基づく論考

ここまでとりあげてきた論考はいずれも、伝統的な時制区分(現在 / 過去 [/ 未来])と、アスペクトという概念を(その適用方法は必ずしも一致していないとはいえ)時制形式の意味規定に用いていた。しかしながら、これらの概念を用いずに時制体系を規定しようとする試みもある。

Rojo & Veiga (1999)は、「時間的関係」(relación temporal: anterioridad, simultaneidad, posterioridad)と、その関係を打ち立てる際の「言及時点」(punto de referencia)を主な道具立てとして、動詞体系を記述しようとする立場と言える[37]。そこでは、前述の伝統的な概念は、ある時点との時間的関係の中に吸収されてしまい、必要とされない(pp. 2919-2922)。

具体的には、従来の論考でも用いられていた"anterioridad"という概念は、アスペクト的特徴としてではなく、他の simultaneidad, posterioridad と並んで、発話時点および(それと関連付けられる)言及時点に対する時間的関係を表す時制的特徴としてとらえられる。

---

[37] Rojo & Veiga (ibid.: 2876)は、動詞時制についての伝統的なアプローチを概観した後、次のように述べ、自らの立場を明らかにしている。

"En términos generales, todas estas aproximaciones que acabamos de mencionar intentan enriquecer la visión tradicional de la temporalidad verbal a base de mantenerla en su estado elemental y complementarla con otras categorías. Existe otra posibilidad, que es la que seguiremos aquí: elaborar una teoría de las relaciones temporales que integre los fenómenos de interés que han sido puestos de relieve por otras aproximaciones." 「概して、今言及したこれら全てのアプローチは、動詞時制の伝統的な見方を、その基本的な部分において維持しつつ豊かにし、その他の範疇によって補足することを試みている。しかし別の可能性もあり、ここではその可能性に従っていく。すなわち、他のアプローチによって浮き彫りにされてきた関心領域の諸現象を統合するような時間的関係の理論を打ち立てることである。」

また、複合時制に対して一部の論考でおこなわれてきた「完了相」というアスペクト規定も認めず、こうしたアスペクト的特徴は、anterioridad という時間的関係から生ずる二次的な産物に過ぎないとする(p. 2920)。

さらに、単純過去形と未完了過去形の間に見られるとされるアスペクト的対立も認めず、そこでの差異も、各形式の時制的特徴の二次的な作用によると考える(p. 2921)。

Rojo & Veiga による時制形式の規定では、次のような概念が設定される。

relación temporal

言語的時間は二方向性をもち(bidireccional)、ある出来事は別の出来事に対し前時的(anterior)、同時的(simultáneo)、後時的(posterior)に位置付けられる。この三つの可能性を Rojo はベクトル(V)の記号を用いて、それぞれ−V、$_0$V、+V と表示する(p. 2876-2877)。

origen (O)

centro deíctico de orientaciones temporales (時間的方向付けの直示的な中心)とも呼ばれる。この時点は、そこから直接的もしくは間接的に、ある動詞形によって表される全過程が位置付けられる基点である。この時点は一般に、発話時とされる[38](p. 2889)。

punto de referencia

この時点は前述の origen である場合もあるし、それと関連付けられた別の時点である場合もある。この punto de referencia との間に打ち立てられる関係が relación temporal primaria であり、それは vector primario に反映される(p. 2882)。

vector originario

origen から直接発するベクトルは特に vector originario と呼ばれる(p. 2882)。

これらの概念を実際の時制形式に適用すると次のような定式化ができる(p. 2881-2882)。

a.	*Canté*	O−V
b.	*Canto*	O $_0$V
c.	*Cantaré*	O+V
d.	*Había cantado*	(O−V)−V
e.	*Cantaba*	(O−V) $_0$V
f.	*Cantaría*	(O−V)+V
g.	*He cantado*	(O $_0$V)−V
h.	*Habré cantado*	(O+V)−V
i.	*Habría cantado*	((O−V)+V)−V

[38] Bello (ibid: 432 y ss.)による"acto de la palabra", Reichenbach (1982: 299-231)による"speech time (S)", Bull (1960: 17)による point present ("any act of observation, the actual experiencing of any event")なども参照のこと。

このうち、cantaba に対応する(O－V) $_0$V を例にとって説明すると、relación temporal primaria は右端にある vector primario によって表されるので、ここでは $_0$V、すなわち同時性ということになる。punto de referencia は、vector primario の左側にある全てのものとされ、ここでは(O－V)、すなわち origen より前の時点と言える。そして vector originario は、origen から直接のびるベクトルとされるので、ここでは－V、すなわち前時ということになる。こうした規定による cantaba の基本的価値は、「origen よりも前の時点」(＝punto de referencia)から見て同時の(＝relación temporal primaria)事象を表すことにあると言える。

こうした定式化の利点は、従来見られたように、形式 (単純形対複合形)や時制区分(過去/現在[/未来])に基づく体系化によって、異質な時制形式が同じ類型に分類されてしまう不備[39]を解決する点にある(p. 2883)。

以上の定式化を、punto de referencia と relación temporal primaria の関係が明瞭になるように図式化すると次のようになる(p. 2884)。

PUNTO DE REFERENCIA	RELACIÓN TEMPORAL PRIMARIA		
	－V	$_0$V	＋V
O	*canté*	*canto*	*cantaré*
(O－V)	*había cantado*	*cantaba*	*cantaría*
(O $_0$V)	*he cantado*		
(O＋V)	*habré cantado*		
(O－V)＋V)	*habría cantado*		

ここでの punto de referencia と relación temporal primaria は、Rojo & Veiga の考察において重要な役割を果たす。ところで、発話時点および言及時点と事象時点の時間的関係を考慮に入れる点で、この立場は Reichenbach (1947, 1982)による時制体系の規定と一見類似しているが[40]、Rojo (ibid.: 2885)はそこでの不備を指摘している。Reichenbach の規定では、言及時点の階層性や連鎖性が考慮されておらず、事象時点(E)、発話時点(S)、言及時点(R)が同じレベルに位置付けられ、この三つの時点が常に標示される。そのため、例えば cantaba と canté には同一

[39] 例えば、伝統的な時制区分に基づく体系化によると、canto と cantaba もしくは cantaré と cantaría の間にある共通の特徴(それぞれ simultaneidad と posterioridad)は無視され、異なる時制(「現在時制」対「過去時制」)に分類されてしまう。

[40] Reichenbach (ibid.)は、発話時点(S [Speech time])、言及時点(R [Reference time])、事象時点(E [Event time])の間の相関関係によって時制機能を規定している。

の定式(E, R_S)が与えられ、二形式の違いは追加的に記述せざるをえない[41]。また、二つの言及時点を設定しないため、*habría cantado* の価値が説明できない点などがあげられる。

さて、この Rojo の規定では、単純過去形は O－V と、現在完了形は(O_0V)－V と定式化されている。これにより、二形式の共通点としては、どちらも relación temporal primaria が anterior であること(右端のベクトルが－V であること)があげられる。一方、相違点は、前述の Alarcos (1994)や寺崎(1975, 1998)による規定のように、時制的特徴(「±過去」)にも、アスペクト的特徴(「±前時」)にも求められることはない。その相違は、単純過去形では punto de referencia がほかならぬ origen (centro deíctico del sistema temporal)であるのに対し、現在完了形ではその referencia と origen との間に simultaneidad の関係が挿入される点にある。つまり後者は、基本的な時制的意味として「origen と同時の言及時点に対する前時性」("anterioridad a una referencia simultánea al origen")を表すとされる(pp. 2902-2903)。

現在完了形はこうした特徴をもつために、現在もまだ終わっていない時間を表す副詞類と共起することが多い。もっとも次の例のように、既に終わったものとして提示される時間に位置付けられる事象や、年代的に遠い事象にも言及できる。

Es para mí una satisfacción poder comunicarles que ayer mismo nuestros investigadores *han llegado* por fin a la resolución total del problema. 「まさに昨日、我々の研究者たちがついにその問題の全面的な解決に至ったということをあなた方にお知らせできて私は嬉しく思います。」

Grecia *ha legado* al mundo todas las bases de la cultura occidental. 「ギリシャは、西洋文化の全ての基盤を世界に残した。」

つまりこの形式は、なお現存する時間に事象を位置付けることにより、発話時と同時的な referencia を設定する。こうした特徴は、従来 Bello (ibid.), Gili Gaya (ibid.), Alarcos (ibid.)を始めとする論考によっても指摘されてきた「発話時との関連性」と基本的には一致すると考えられる。

以上、Rojo による時制体系の規定と、その中での二形式の位置付けを確認した。ここでの論考は、発話時点・言及時点の設定およびそれらとの時間的関係だけを用い、これを時制体系全体に適用するものと言える。確かにその適用結果は、前掲の定式化からも明らかなように、時制間の関係が明瞭に示され、非常に体系立っている。

もっとも、こうした汎用性の高い道具立てを用いることにより生ずる問題もないとは言えない。単純過去形と現在完了形について言えば、それらの共通の特徴とされている anterior (－V)という性質があげられる。Rojo はこの anterior を時制的特徴として用いているとみられる

[41] この定式は事象時点と言及時点が同時で、いずれも発話時点よりも前にあることを示している。Reichenbach (1982: 301-303)参照。

ので、二形式は同質の時制的特徴を部分的に共有していることになる。果たして、単純形の過去時制がもつ－V と、複合形がもつ－V を同列に扱ってよいのであろうか。Anterior を時制的特徴として用い、その汎用性を高めることで時制体系全体を一貫した方法で記述できる反面、－V の特徴の中に異質な価値が統合され、そこにある重要な差異が不明瞭になってしまうおそれは免れまい。

前述した Alarcos (1994)や寺崎(1975, 1998)のように、二形式を時制的特徴とアスペクト的特徴の組み合わせで規定していく立場では、anterior という概念は複合時制のアスペクト的特徴としてのみ用いられ、その汎用性は低い。しかしながら、「過去の事象に言及する仕方」の違い[42]が二形式の差異として明示される点で、とりわけこれら二形式の記述にとってはふさわしいと思われる。こうした理由から本論文では、二形式の差異の仕組みが明瞭に示されるこちらの規定方法を支持していく。

(2) 「語りの世界」の時制と「説明の世界」の時制

伝統的な時制区分やアスペクトによらずに時制体系を規定するもう一つの立場として、ここでは Weinrich (1974, 1982)による論考をとりあげる。その基本的な立場は、時制形式の価値を、文レベルにとどまらず、それらが現れるテクストとの関係によって規定しようとする立場と言える。そこでは、従来の時制的区分や時間関係、アスペクトの概念は必要とされず、テクストの中で時制形式がどのような機能を果たすかに注目が置かれる。そうした機能に関わる概念としては、次のようなものがあげられる。

① 話者の発話態度

まず、話者の発話態度により、「語りの世界」(mundo narrado)の時制と「説明の世界」(mundo comentado)の時制が区別される。これは、Benveniste (1966, 1983)による「歴史」(histoire)と「話」(discours)の区別を受け継ぐ概念と言える (Weinrich, 1982: 321)。Benveniste は、フランス語に過去の出来事を表す二つの形式(単純過去形[il fit]と複合過去形[il a fait])があることを説明するために、言表行為の違いによって時制体系を上記の二つの局面に区分する。「歴史」の局面は、過去の出来事を物語ることにその特徴がある。「出来事は、それが歴史の視界に現われるにつれて生じたものとして提示される。ここにはだれ一人話すものはいないのであって、

[42] つまり、単純過去形は「＋過去」により、現在完了形は「＋前時」により、過去の事象に言及できるという違いである。

出来事自身がみずから物語るかのようである」という(Benveniste, 1983: 223)。ここには単純過去形、未完了過去形、大過去形が含まれる。この言表行為は、今日では書き言葉においてしか用いられないという。一方、「話」の局面は、話者と聞き手を想定し、前者が後者に何らかの影響を与えようとする言表行為とされる(Benveniste, ibid.: loc.cit.)。ここでの基本的な時制は現在形、未来形、複合過去形とされるが、単純過去形を除いて全ての時制が可能であるという。また、実際の言表行為としては、話し言葉のみならず、手紙、回想録、戯曲など、話し手(書き手) - 聞き手(読み手)の関係をうちたてようとする書き言葉も含まれる。

Weinrichによる「語りの世界」(mundo narrado)と「説明の世界」(mundo comentado)は上記の「歴史」と「話」に対応し、話者がとる発話態度の違いとして区別される。この区別はテクストを受容する聞き手に要求される態度の違いにも反映される。「説明」の時制では、話し手は聞き手に対して、テクストを緊張の態度で受容することを要求し、「語り」の時制では、緊張緩和の態度で受容してもよいことを指示する(Weinrich, 1982: 37)。「説明」の時制が用いられる代表的なジャンルとしては、戯曲中の対話、覚え書き、社説、遺言状、科学的な報告、哲学的エッセイなどがあげられている。一方、「語り」の時制が用いられるのは、青春時代の話、冒険談、童話、聖人伝、歴史記述あるいは小説、議事録的な文書などとされる。

もっとも、Weinrichによる時制配分はBenvenisteと異なり、フランス語の場合「説明」の時制に現在形、複合過去形、未来形が、「語り」の時制に単純過去形、大過去形、未完了過去形、条件法が含まれる。つまり、Benvenisteの配分における大過去形、未完了過去形、条件法のように、両方の世界にまたがる時制はないとされる[43]。

② 「発話の方向」

これは、テクスト時間に対する行為時間の同時性、非同時性を示すための機能である。その表現として、「回顧時制」「ゼロ時制」「予見時制」が区別される(Weinrich, 1982: 73-75)。「ゼロ時制」は、テクスト時間と行為時間の関係について、話者が聞き手の注意を喚起しない場合とされ、フランス語を例にとると、「説明」の時制群では現在形が、「語り」の時制群では単純過去形と半過去形がこれに属す。一方、そうした関係に注意を促すのが残り二つの表現で、行為時間が回顧される場合が「回顧時制」、予想される場合が「予見時制」である。「ゼロ時制」(現在形、単純過去形、半過去形)以外の時制は全て、これらのうちのいずれかとされ、「説明」の時制群では複合過去形が回顧時制、未来形が予見時制であり、「語り」の時制群では大過去形または前過去形が回顧時制、条件法が予見時制である。一般的に、各時制群

[43] 大久保 (1990)は、これら二つの論考による未完了過去(および大過去、条件法)の位置付けの違いについて、特に単純過去、複合過去との関連から考察している。

のゼロ時制はその他の時制よりも頻度が高いとされる。

③ 「浮き彫り付与」

さらに、「語りの世界」の時制群の中の「ゼロ時制」について、「浮き彫り付与」の機能に関わる「前景」の時制と「背景」の時制が区別される(Weinrich, 1982: 123-129)。「前景」とは物語の中心的な筋を構成する要素、「そのためにこそ物語が語られる事柄」(Weinrich, ibid.: 127)であり、フランス語では単純過去形がこの機能を果たす。「背景」とは、語り手が挿入する付帯状況、描写、省察など、「前景」の理解を助ける事柄であり、半過去形によって表される。

単純過去形と半過去形は、上記①と②の区別からは両者とも「語り」の「ゼロ時制」ということになり同類であるが、「語り」の構造内での機能に注目すると、こうした違いが見られる。つまり、これら二時制は「物語に浮き彫りを与え、そして物語をくり返えし前景と背景に分けている」(Weinrich, ibid.: 126)と言える。

以上の概念から理解されるのは、ここでは、これまで見てきたような文単位での時制的・アスペクト的規定をおこなう論考とは異なり、それが含まれるテクストや話者の発話態度との関係で時制形式の出現を説明する立場がとられているということである。本論文のようにスペイン語の現在完了形と単純過去形を問題とする場合、こうした論考から得られるヒントはあるだろうか。ここでの論点のうち、二形式の記述に特に関わってくるのは、発話態度による「説明」と「語り」の時制の区別である。Weinrich は、主にフランス語における現象をその論考の根拠としているが、フランス語の単純過去形と複合過去形の対立において有効な原則をそのままスペイン語に適用できるかという問題をまず考えねばならない。

Weinrich (ibid.: 112-122)は、スペイン語の単純過去形と現在完了形についても言及している。そこでは、短編、小説、伝記的エッセイ、叙情詩、戯曲、評論、哲学的エッセイなど、様々なジャンルの書き言葉における二形式の出現状況が観察されている。それによると、短編や小説などの「語りの文学」では単純過去形が著しい優勢を占める一方、戯曲、評論、エッセイでは現在完了形が明らかな優位に立っている。このことからも単純過去形は語りの時制、現在完了形は説明の時制であることが裏付けられるという。

確かにこうした観察はスペイン語の書き言葉の傾向をよくとらえていると思われる。しかしながら、ここでの観察が書き言葉に限定されていることは問題であろう。話し言葉に注目した場合、スペイン語の一般的な使用では、フランス語と異なり、両形式とも普通に現れる上、区別して用いられている。一方の形式に極端に偏っているという状況は見られない。この点は Barrera (1972: 300-301)も指摘している。それによると、フランス語には、話されるフ

ランス語と、書かれるフランス語という二つのコード(codes)があり、単純過去形の使用は後者にほぼ限定されている。ところがスペイン語には、比較的均質な一つのコードがあるのみである。つまり書き言葉か話し言葉かという違いによって、一方の形式がほとんど出現しなくなるということはない。このように事情の異なる二言語に同じ原理を当てはめることには慎重にならねばならない。ただし、こうした議論では話し言葉、書き言葉のレベルの区別、もしくはテクストのジャンルの区別と、「説明の世界」、「語りの世界」の区別が混同されているとみられることも指摘しておかねばならないだろう。話し言葉の中に「語りの世界」が、逆に書き言葉の中に「説明の世界」が挿入されることは言語によらず十分ありうることである。

Thibault (2000: 18-21)は、スペイン語の上記二形式を扱う中で Weinrich の論考の不備を指摘しているが、その批判はより本質的な部分に向けられている。Thibault は、その論考が循環論に陥っていると述べている。というのもそこでは、二つの時制群について何の正当化も厳密な定義もなされないまま、(おそらくは一般化できるにしても)ある小さなテクストの中で[44]時制形式が二つの異なる群に分かれて機能していることをもとに、そうした区分が打ち立てられている。そして「語り」のテクストは「『語り』の時制を含むテクスト」であり、「説明」のテクストは「『説明』の時制を含むテクスト」であるという仮説が立てられる。続いて残りの部分で、この仮説が有効であり、いかなるテクストにおいても立証可能なことが示される。しかしながら、Weinrich はそうした仮説の基盤となる部分をあいまいにしたままである。つまり、問題は「語り(説明)」のテクストを「『語り(説明) 』の時制を含むテクスト」と規定しておきながら、「語り(説明)」の時制の定義を明示していないことにある。そこでは、各時制群に属す時制形式のリストが提示されるのみである。この点で循環論に陥っているというのである。

以上、Weinrich による論考の骨子と問題点を概観してきた。実用面、理論面で議論になりうる点は認められるとはいえ、発話態度の違いとして二つの局面を設け、テクストという単位で時制形式の出現をとらえる視点は多くの示唆を与えてくれる。部分的にであれ、スペイン語の分析にこうした方法をとり入れることで見えてくる傾向もあるのではないだろうか。Weinrich (ibid.: 112-122)は、前述のスペイン語を扱った部分で、テクストのジャンルによる二形式の出現比率の違いや、テクストの展開と各形式の出現との関係など、興味深い観察もしている。本論文では第3章、第4章でおこなう調査の一部でこうした視点をとり入れていくことにする。

---

[44] Weinrich は、Thomas Mann によるドイツ語のエッセイ *Goethes Laufbahn als Schriftsteller* の一部を分析している。

1. 3. 時の副詞類との関係

前節までで見てきたような二形式の意味的差異は、これらと共起する時の副詞類にも反映してくる。本節では、Alarcos (1980[3])における記述をもとに、各形式と時の副詞類の親和性に注目する。

Alarcos (ibid.: 22-29)によると、時の副詞類の中には、両形式と共起できるものと、どちらか一方としか共起できないものがあるという。

まず、どちらか一方の形式としか共起できない副詞類について見ていこう。

(1) 現在完了形と共起する副詞類

ここに含まれるのは、話し手や書き手にとっての現在時が含まれる期間の中で出来事が起こったことを表す副詞類である。具体的には、hoy「今日」, ahora「今」, estos días「ここ最近」, esta semana「今週」, esta tarde「今日の午後」, esta mañana「今朝」, este mes「今月」, el año en curso「今年」, esta temporada「今期」, hogaño「今年」, todavía no「まだ…ない」, en mi vida「今まで一度も…ない」, durante el siglo actual「今世紀の間」などがあげられる。以下に例を引用する。

Ahora mismo por el camino *he tenido* un sofoco, éstas lo *han visto*. (Benavente, *Señora Ama* 1. 4) 「つい今しがた私は道でかっとなりました。この人たちがそれを見ました。」

Y es éste el que *ha anunciado* hoy la venta. (*ABC*) 「今日売却を知らせたのはこの人である。」

Esta mañana *ha llovido*. (cartas particulares) 「今朝雨が降った。」

Antes *he escrito* a H. (cartas particulares) 「以前私はHに手紙を書いた。」

La leña que *has acarreado* hogaño está muy verde. (Benavente, op.cit. 1. 2) 「今年お前が運んだまきはとても若い。」

El flamante Dominio británico *ha hervido* estos días en fiestas (*ABC*) 「英国の新しい領土は、ここ数日祭りに沸いた。」

¿No *has acabao* de aviar entoavía? (Benavente, op.cit. 1. 2) 「まだ準備が終わらないのか？」

En estos años se *han enriquecido* bastante con la venta del pimentón. (Unamuno, *Andanzas y visiones españolas*, Col. Austral, 1940, p. 213) 「ここ数年、パプリカの売り上げでかなり豊かになった。」

Durante el siglo presente se *han escrito* infinidad de novelas. (Gili Gaya, § 123) 「今世紀の間に無数の小説が書かれた。」

もっとも、esta mañana や antes といった副詞類でも、各々esta tarde や ahora に対立するものとしてとらえられる場合には単純過去形が用いられる。

Antes no *hice* reparo, pero ahora (...) 「以前は遠慮しなかったが、今は…」
Me *dijeron* esta mañana que te habías ido. 「今朝私は君が出て行ってしまったと言われた。」

(2) 単純過去形と共起する副詞類

ここには、話者にとっての現在時が含まれない期間の中で行為がおこなわれたことを示す副詞が含まれる。例えば、ayer, anoche, el mes pasado, aquel día, un día, hace años, entonces, cuando 節などである。また語りでは、出来事を絶対的な過去に位置付けるので、やはりこの形式が用いられる。

Cuando *fuiste* ayer al pueblo (Benavente, op.cit. 1. 3) 「昨日君が村に行った時…」
Salió anoche a caballo (Benavente, op.cit. 3. 8) 「昨晩彼は馬で出かけた。」
Hace pocos días *expliqué* (*ABC*) 「ほんの数日前私は説明した。」
Donde un día *tuvo* asiento el maravilloso trono de la reina de Saba (*ABC*) 「かつてサバの女王の驚嘆すべき王位が座を占めた所で…」
Anteayer *falleció* en Salisbury el nieto de aquel T. Bolton (*ABC*) 「一昨日ソールズベリでかのT.ボルトンの孫が亡くなった。」

また、次のような問答を例に引いて、二形式の違いを説明している。

—¿Es verdad que *ayer* ibas tú conduciendo uno? (coche) 「昨日君が車を運転して行ったというのは本当？」
—¿Ya te lo *han dicho*? 「もう誰かが君にそれを言ったのか？」
—Y nos *dijeron* que era tuyo... 「それ(車)が君のものだと言われたよ…」

最初の話者は、彼にとっての現在が含まれていない時間を表す ayer によって行為を客観的に位置付けているので、三番目の文でも単純過去形(dijeron)を用いている。第二の話者は、「自分が車を運転したこと」を誰かが誰かに話すという行為に言及しており、この行為は、「昨日」から今話している時点までのいかなる時点においても起こりうる。つまりこの時間には話者にとっての現在が含まれている。よって現在完了形が用いられるのである。

特に、疑問文における現在完了形の使用は次のように説明できる。質問者にとって、当該行為は過去のある時点と現在時を結ぶ時間上の不特定の時点に生じたものである。つまり、発話時が含まれる時間が想定されているためにこの形式が選択されると言える[45]。もっとも、

[45] —¿Se ha ido tu padre? 「君の父さんは出発しましたか？」— Sí, se marchó anoche. 「はい、昨夜出発しました」という問答の問いにおける現在完了形も同様の理由で説明がつく。一方、答える側は、父親が立ち去った正確な時間を知っているので単純過去形を使っている。

質問者が当該行為が過去に属すことを既に知っていて、単にその時点をはっきりさせたいだけなら、単純過去形が用いられる。

—¿Cuándo compraste el libro? —Lo compré el año pasado.
「君はいつその本を買いましたか?」—「去年それを買いました。」

同様に、例えば、不在だと思っていた友人に会った時には、—¿Cuándo has llegado?「いつ着いたのですか?」—Llegué ayer.「昨日着きました」という問答が予想されるが、もう帰ってきていることを知っていて、単に帰って来た日を確かめたいだけであれば、—¿Cuándo llegaste de Madrid?「いつマドリードから着いたのですか?」—Llegué el viernes pasado.「この前の金曜日に着きました」のような問答になるという。

(3) 二形式と共起する副詞類

継続や反復を表す副詞類がこれにあたる。もっとも、そこでの二形式は意味的に区別され、現在完了形と組むとその行為が現在まで反復もしくは継続していることを表し、単純過去形と組むと過去の中で終了していることを表す。

Los estudios orientales *han ido* siempre a la zaga de los clásicos. (*ABC*) 「東洋研究は常に古典の後を追ってきた。」
Porque nunca te *ha faltado* que comer. (Benavente, op.cit. 2. 1) 「なぜなら君は食べるのに困ったことは一度もないから…」
Algunas veces se lo *he dicho* a él. (Benavente, op.cit. 1. 6) 「何度か私は彼にそのことを言った。」

Roosevelt, que siempre *se sintió* noble del lugar, (...) (*ABC*) 「ルーズベルトは常に自分がその土地の高貴な生まれであることを感じていたが…」
Nunca *tuvo* oficial o secretario a su servicio. (*ABC*) 「彼は決して自分に仕える役人や秘書をもたなかった。」
Sólo algunas veces *manifestó* sus ideas. 「彼はただ何度か自分の考えを表明しただけだった。」

(4) まとめ

以上の観察からは、各形式で共起しやすい副詞類が異なること、両形式と組む副詞類については、二形式の意味に区別が見られることが分かる。こうした副詞類は、各形式がどういった用法で用いられているのかを判断するための手がかりとなる。本論文でおこなう調査でもこうした副詞類に注目していくことにする。

1.4. 第1章のまとめ

ここまで、本論文が対象とする単純過去形と現在完了形について、現代半島スペイン語における基本的な意味と用法を確認した。二形式は「発話時との関連付けの有無」によって区別されるというのが、従来の研究の大勢が指摘しているところである。単純過去形は発話時と断絶した絶対的な過去を表し、現在完了形は発話時と関連をもつ、発話時以前の事象を表す。現在完了形については、具体的な用法として「発話時における結果状態」、「発話時に至る継続・反復」、「直前の完了」、「拡張された現在の完了」などを表す。

次に、各形式の時制的・アスペクト的特徴に関わる問題を整理した後、本論文が支持する規定の仕方を確認した。本論文では、二形式は時制的にもアスペクト的にも異なる特徴をもつと考える。単純過去形は、時制的には「＋過去」、アスペクト的には「－前時, ＋完結」と、現在完了形は、時制的には「－過去」、アスペクト的には「＋前時」と規定するのが、実際の用法との関連などからも適切である。

続いて、二形式の意味規定に従来の時制区分やアスペクト的特徴を用いない、その他の論考を確認した。Rojo (1999)は、発話時点および言及時点との時間的関係(anterioridad, simultaneidad, posterioridad)だけによって、時制体系全体を規定しようとする立場と言える。そこでは、時間的関係の汎用性が高く、非常に体系立った記述が可能となる反面、ここで問題とする二形式に対して設定される anterioridad が果たして同じ性質のものなのかという問題が残る。

次にとりあげた Weinrich (1974, 1982)では、テクストとの関連において時制が規定される。話者の発話態度により「説明」の時制と「語り」の時制が区別され、現在完了形は前者、単純過去形は後者に属すとされる。こうした原理の適用の可能性が言語によって異なるという問題や、各局面が厳密に定義されないままに、その証明が試みられているという問題が指摘されてはいるものの、テクストの種類や展開と各形式の出現との関係という観点は示唆に富むものである。

最後に、時の副詞類と各形式との親和性を確認した。「発話時と関連をもつ前時性」を表す現在完了形は、発話時を含む時間を表す副詞類と共起しやすく、「発話時と断絶した過去」を表す単純過去形は、発話時と対立する過去の時間を表す副詞類と共起しやすい。継続・反復を表す副詞類は両形式ともに共起するが、その場合各形式で意味が異なる。現在完了形と組むと発話時までが想定されるのに対し、単純過去形と組むと過去において終了していることを示す。

次章では、二形式間に上述のような区別があるとされる半島スペイン語から視野を広げ、二形式の区別の地理的なバリエーションに注目していく。